

ヴィラヴィツラのことについて

ヴィラヴィツラは郊外にある森林の中に建つ別荘である。この家には現在、4世帯が暮らしている。週末になるとこの家に住む人たちはヴィラヴィツラに帰ってくる。集まって住む形はそれぞれで住む人たちも変わる。時間の経過により人々の認識は変わってもヴィラヴィツラはそこに存在し続けるだろう。

虚構としての住宅

帰りたいという感情の対象は必ず虚構である。なぜなら帰りたいと思った瞬間、私たちは必ず帰りたい場所にはいないからである。私たちにとつての「帰りたい家」は虚構であり実体がない。

「帰りたい家」という虚構をつくり上げる

私たち4人は「帰りたい家」という虚構を創るために案を出し合った。私たちの中で「半地下の空間、洞窟のような空間、集まって住む空間」などの認識が合致した。それはたまたま合致したわけではない。旧石器時代に人間が住んでいた（住み始めた）のは自然の洞穴や木の骨組みに獣皮を覆ったものである。私たちは無意識のうちに「帰りたい家」を住宅の原空間と認識していた。

ホモサピエンスが帰る家

私たちホモサピエンスがほかの種との生存競争で勝ち抜いた理由は虚構を創作する力にあるという。虚構を共有することで協働し、文明が発展した。私たちは意識無意識関係なく虚構を信じることで生きている。ヴィラヴィツラでは「帰りたい家」という虚構を共有している。

ヴィラヴィツラ

～帰りたい家という虚構について～

家型、箱型からの脱却

私たちの「帰りたい家」は生産消費社会には存在しない。規格化された住宅や当たり前に四角形（幾何学）を用いる住宅に疑問を持った。だから私たちは「帰りたい家」という虚構を生み出すべく人の手で空間を創造した。原空間がそこに生まれた。

「帰りたい家」は実体になる

私たちが考えた原空間（帰りたい家）は虚構だ。しかしながら住宅は実体である。柱があり壁があり屋根があり、そしてその屋根の下で私たちは生きている。だから私たちは「帰りたい家」という虚構を、生きるための家へつまり実体することに注力した。

虚構の共有と集まって住むことヴィラヴィツラに集まった人々は、原空間（虚構）や中庭、居住空間など（実体）を共有し、生きている。いついかなる時間においても、ヴィラヴィツラは実体と虚構（イメージ）を共有し続ける。だから私たちは「帰りたい家」を目指し手で作られた空間（虚構）を倍じることができると、ヴィラヴィツラに帰りたいと思えるのである。

